

優秀賞

江戸しぐさから学ぶ小さな親切

山口県 川上中学校 二年 藤本 美南

私は気が利かない。自分でも自覚している。よく母にも怒られる。しかし、(これが私の性格。これでいい) そう思っていた。

ある日、道徳の授業で「江戸しぐさに学ぶ子どもの『作法』」という本の一部を紹介してもらった。そこには、江戸時代の人が行っていたたくさんの小さな親切があった。(なんだ、このくらい私でもできるじゃん) と思う内容ばかりだった。

例えば、「人とすれ違うときはぶつからないように肩を引き合う」、「初めて会う人にもあいさつをする」などだ。

しかし、私は江戸の作法の中のあるものを聞いてドキッとした。それは「おつとめしぐさ」というものだ。誰かに頼まれたわけでもなく、自らごみを拾う。そんな簡単なことが、あるときの私にはできなかったのだ。

廊下を歩いているとき、ごみが落ちていた。いっしょにいた友人もそのごみに気はついていて、二人とも無視して通り過ぎてしまった。ごみを拾わなかったのだ。拾っている姿をまわりに見られ、「なに、いい子ぶっとな」と言われたくない、恥ずかしいという気持ちの方が勝ってしまった。

人が見ているから拾わない。しかし、このときの私は、誰も見ていなくても拾わなかっただろう。

心のどこかで、誰か拾ってくれるだろうと思っていた。しかし、通り行く人は誰も拾わなかった。結局、(誰かが拾ってくれるだろう) という考えだったのだ。

あたりまえのことができなくなっている私たちは、江戸しぐさから気づかされ、恥ずかしくなった。気が利かない自分の性格を正当化していたが、本当にそれでもよいのかと自問した。答えは、明らかだった。

夏休みに入り、母の忙しさは倍増した。そこで私は、江戸しぐさの「気働き」を使って、母が望むことの先の先を率先して行うことに努めた。例えば、朝のごみ出しや部屋の掃除など、いつも母が行っている家事だ。仕事から帰った母は、開口一番「ありがとう! 気が利くね。」と言ってくれた。私も思わず、「いつもありがとう。」と口に出していた。

江戸しぐさの「有り難うしぐさ」が自然にできていた。一度言えるようになると、二回目からは楽に言えるようになっていった。

親切は「ありがとう」を生み、その「ありがとう」がまた親切を生み出す。人が見ている、見ていないは関係なく、親切な行為をすることは、自分自身の成長につながり、まわりの人の成長にもつながると思う。

これからも江戸しぐさに学び、小さな親切の輪を広げていきたい。そして、もう「気が利かない」とは言わせない。